

小田原史談

第120号

発行所 小田原史談会
小田原市南町2-3-21

新春あいさつ

会長 中野 敬次郎

「一九八五年新春おめでとう」と挨拶するのは、もう十五年もすると二十一世紀になる。それまでしっかりとやりましようという軽気持ではげまし合えるように思うが、「昭和六十年あけましておめでとう」とは、この六十年という言葉が妙に重たくて軽々しく挨拶しづらいような気になる。昭和もいつの間にか六十年になったのかと思うと、鳥兔勿々、歳月の流れの早さに驚かされる。全く一つの年号で六十年続いて、まだもつと続くのだから奇蹟である。

明治以前は一天皇の時代でも、事情によって年号を幾度も変えられたが、明治以後は一代一号で、一天皇の時代は一年号で行くことになってから、こんな

に一年号が六十年間とそれ以上にも続くようになったのである。それにしても、六十年も続いた年号は昭和前の史上になく、また在位六十年という天皇は実証史上にはない。本当に奇蹟である。

中国流の干支の年ぐりでは、十干十二支の組合せは六十回で満になるのだから、六十一年を一回転として六十一年度と同じ干支の組合せの年がくる。そこに起ってくるので、六十年で小改新が起り、その十倍の六百年で大革新が起り、二十倍の千二百年毎に革命が起きるのだという。

日本でもこの思想にもとづいて、日本中が百余国に分れた肇国体制（二世紀）

三世紀）さら天皇制の大改新に（七世紀）よって統一中央集権の国家に変わり、十三世紀の武家政治体制に変わり、十九世紀の明治維新に変わる六百年周期をまことしやかに説く向もある。

六十年周期にかぶれたわけでないが、昭和も六十年の辺から文化、思想、経済、政治、社会、何につけても大きく転換してくる時期のような気がする。

身近いところで言ってみても小田原市でも二月には新市長になるから新しい市政が行われるだろう。我が史談会も創立三十周年を迎える年になる。

三十年と言えは、「十年一めぐり」としてすでに三めぐりになる。人変り、人去り、人來つて、多くの思出や、懐かしさも多きがそれはそれとしてこの辺で温古知新、活力を入れる時期でないかと思う。三十年の記念事業もやりたいが、それにしても会員諸兄の新鮮な意見と案がほしい。

郷土史新資料(1)

『皇国地誌』

足柄上郡玄倉村

皇国地誌

相模国足柄上郡玄倉村

往昔ヨリ本郡に属シ、古八伴部郷ナルベシト郡郷考地理局ニイヘリ、治承ノ頃或ハ川村トモ見ユ、川村向原大井ノ庄ニシテ、川村郷十二村ノ一ナリ、三記同巻附録ニ依テ實録ニ曰ク、今玄倉村ト書ス、是孫弘山ノ金剛座石ノ正面ナル谷ノ末ニシテ、塔ケ嶽ノ北ニ当レリ村名ハ、全ク梵語ニシテ、俱盧俱羅ナリ、俱留孫ノ留文字靈ト相通ズ、孫ノ字ヲ省呼テ唯俱盧トヨビシナラシ、又俱羅トハ、南海帰奇伝ニ、或ハ、有収其設利羅為亡人作塔名ケテ為俱羅形子如小塔トシ、無輪蓋、云々俱羅ハ、乃チ舍利塔ノ梵語也、サテ俱盧俱羅トハ、ヤガテ俱留孫ノ舍利塔ト云フ事ナリ、村内ナル塔ケ嶽ハ、俱留孫ノ舍利アルヨリノ名ナレバ、俱盧俱羅村ナリシヲ、後イツシカ今ノ文字ニ転ゼシナラン、云々

古来西山家九村ノ一ナリ、川村郷中ノ連山ヲ旧クハ川村山トイヘリ、郡ノ西部ニアリテ、殊ニ幽寂ノ地ナリ山ノ表裏ニ村落ヲナスヲ、東山家ト西山家ト稱フ、今山裾ノ村々ニテハ、川村山ト稱ヘズ、各私ノ字ヲ呼ベリ、近キ頃ヨリ、本村及ビ中川、世附ノ三村ヲ新山三ケ村ト稱フ、天正十八年四月豊太閤ノ出シ、制礼市川平藤ニハ、河村郷ヨヅク中川、黒藏以上四ヶ所山作中トアリ、正保元祿ノ國図ニハ、川村ノ内ト傍記ス、寛文七年、領主稲葉美濃守正則、初メテ本村山中ノ材木ヲ切出スベキ旨ヲ令シ、貞享二年、此事止ミシガ、三年、大久保氏ニ代リテハ本村及ビ中川、世附ノ三村共ニ切出スベキ由ヲ命ゼリト言フ、元祿十六年、癸未十一月二十三日、西南端ノ字向沢ノ山闕崩レテ、実相寺トモ、二十三戸ヲ圧倒シ住僧森岩外十五人馬三頭死セリト言フ、今ナホ小管沢ニ、當時流シ出シ巨石、又岸頭ノ闕崩セシ蹟、顕然タリ、口碑ニ、在昔溝呂木權十郎、今御山ノ口八郎右衛門右衛門、生谷善右衛門等ノ四名相謀リテ開拓シ、逐一村落トナシ、トイヘリ

疆域
寅廿二度ヨリ、丹沢山ノ峯ヲ城リテ、卯廿度孫弘山マデハ、愛甲郡宮ヶ瀬村、卯廿度、孫弘山ノ頂ヨリ峯界ニシテ、同廿五度マデハ、同郡堀山下村
卯廿五度ヨリ、峯ヲ城リテ、辰二度マデハ、本郡三回部村、辰二度ヨリ、峯ヲ界トシテ、午廿一度マデハ、本郡寄村、午廿一度ヨリ、峯ヲ城リテ、未十六度マデハ、本郡皆瀬川村、未十六度ヨリ、山林ヲ界トシテ、同廿九度マデハ本郡神繩村
未廿九度、大野山ノ峯ヨリ亥十五度檜ホラ丸ノ頂マデハ、本部中川村、亥十五度、檜ホラ丸ノ頂ヨリ、峯界ニシテ丑一度、薬師嶽ノ頂マデハ、本國津久井郡青根村
丑一度、薬師嶽ノ頂ヨリ峯界ニシテ、寅十一度、丹沢山ノ頂マデハ、同郡鳥屋村
幅員
寅ヨリ申、九千六百五間己ヨリ亥、三千百間

管轄沿革
 『神奈川県皇國地誌殘稿』
 に載る谷ヶ村以外五ヶ村と同一につき省略
 管轄距離
 寅十八度 神奈川県庁へ、
 式十三里式十式町五十九間
 巳十四度 小田原支庁へ
 八里式十四町三十三間
 四隣距離
 卯廿七度 大住郡堀山下
 村元標へ、三三二一町三十一間
 卯廿八度 本郡三廻部村
 元標へ、三三二四町四十七間
 辰八度 本郡寄村元標
 へ二里十一町四十七間
 午十六度 本郡皆瀬川村
 元標へ、三三二四町四十六間
 未廿九度 本郡神繩村元
 標へ、三三二四町二十四間
 戌廿七度 本郡中川村元
 標へ、二里十町八間
 近傍駅市距離
 巳四度 洵綾郡東海道
 大磯駅元標へ、十二里三十
 町五十九間、但、元標へ、中
 央寺向山六百里、未二十
 六度、小田原道ノ十字中、
 字下ノ原二百九十七番宅地
 ノ西ニアリ、
 地勢
 東北部ニ葉師ヶ嶽、東部
 ニ山伏峠、東南ニ孫山、
 北ニ檜ホラ丸、西ニ大野山
 ノ高嶺、重疊連亘シテ、全
 地段階ナリ、古來西山家、
 又新山ノ称呼空シカラザル

山村ナリ、只西南端ノ溪間玄
 倉ノ西岸ニ水田纒ニ開ケタ
 玄倉川ハ、孫山ニ起リ箒
 木杉ニ発スル一条ト会同シ
 葉師ヶ嶽ヨリ出ル一条、其
 他数条ヲ併セテ、中部ヲ西
 へ奔流ス、小田原道ハ、中
 部ヲ南ヨリ東へ通ジテ、孫
 山ノ頂ニ達シ、寄道ハ、
 小田原道ヲ分レテ、南部ヲ
 南へ通ズ、人家ハ、東南端
 ナル、字立間山ノ南半腹ヨ
 リ、山脚ニアリ、運輸尤モ
 不便、薪炭アマリアリ、
 地味
 其色黒ク、細砂雜ハル、
 其質下等、宝永ノ降砂多キ
 ヲ以テ、稻、梁ニ適セズ、
 只桑、茶、芋、粟ニ適ス、
 水利可ナレドモ水害ヲ恐ル
 田 二町五段二畝五歩
 畑 五町六段六畝二十
 三歩
 宅地 八段五畝二十五歩
 山林 四百三十一町一段
 二畝十六歩
 藪 二段二畝八歩
 芝地 二段二畝二十八歩
 總計四百四十町六段二畝十
 五歩、外ニ荒地 十町二段
 九畝二十六歩管林 七千五
 百五十四町一段二畝歩
 貢租
 (記載なし)
 戸数 本籍平民二十六戸
 社 四戸
 寺 一戸

總計三十一戸
 人員 本籍平民男七十九人
 女七十七人
 總計百五十六人
 馬 十五頭
 但、戸数以下、明治九年一
 月一日調
 山 別ニ調書アリ
 玄倉川 卯十三度、孫山
 ノミタラシ、字ナベワリ
 ニ起リ、寅十三度、不動ヶ
 嶽ノオモトノ平ノ西溪ニ発
 スル、箒木杉沢或ハ、道、北
 沢全ク立ト会同シ、葉師ヶ
 嶽ノ熊木沢ヨリ出ル一条、
 其他ノ溪水数条ヲ併セテ、
 中部ヲ西へ奔流シ、未二十
 度、字河原ヨリ、本郡神繩
 村へ流ル、其長一万九千九
 間、幅六尺ヨリ十間、深サ
 一尺、或ハ五尺、急流ニシ
 テ清ク、舟筏通ゼス、
 沢 小川沢 午十三度、字新
 山ノ溪間ニ発シ、数条ノ溪
 水ヲ併セ、中部ヲ西ヨリ南
 へ、四千間、幅六尺ヨリ二
 間、申十六度字小畑平ニテ
 玄倉川へ入ル、急流ニシテ
 清
 小菅沢 午十九度、字竹
 ノ本ニ起リ、向沢ノ一条ヲ
 併セテ、南部ヲ西へ、千五
 百五十間、幅六尺ヨリ二間
 未二十五度、字日陰ノ畑ヨ
 リ、玄倉川へ入ル、

道路
 小田原道 未一度、本郡
 神繩村ヨリ、字河原ニ來リ
 中部ヲ東南へ、一万千九
 十九間、幅字奥畑畑地アリ
 マデハ九尺、或ハ是ヨリ
 幅六尺尤嶮トス、西二十度
 孫山ニ至ル、是ヨリ東へ登
 ル百八十間、塔ヶ嶽ノ頂ニ
 達ス
 寄道 未二度、字竹ノ本
 ニテ小田原道ヲ分レ、南端
 ヲ南へ、三百二十間、幅八
 尺、午十九度、同字ヨ
 リ、本郡寄村へ通ズ、
 秣場道 未二十九度、字
 上畑ニテ、小田原道ヲ分レ
 西部ヲ北へ、九百五十間、
 幅七尺、申ノ方、字立山
 ノ秣場ニ至ル、
 掲示場 元標ト併立ス、村
 ノ西南入口ヲ距ル、十町〇
 四間
 社 八幡社 式外、村社、々
 地、東西四十間、南北十四
 間三分、面積百四十三坪、
 未二十八度、立間山ノ半腹
 字中畑二百六十二番地ニア
 リ、祭神心神天皇、例祭九
 月十九日、社地老樹林立シ
 テ、草薺タリ、
 熊野社 雜社、々地、東
 西三間、南北四間、面積十
 二坪、未二十度、字奥畑四
 百五十八番地ニアリ、祭神
 伊弉諾尊、例祭九月十一日
 熊野社 雜社、々地、東
 西三間半、南北四間、面積

十四坪、未二十六度、字上畑
 四百一番地ニアリ、祭神上
 二同ジ、例祭九月二十日、
 子ノ神社 雜社、々地、
 東西三間、南北四間、面積
 十二坪、未二十八度、字上
 畑四百三番地ニアリ、祭神
 大己貴命、例祭九月十七日
 寺 実相寺 眞如山ト号ス、
 黄蘗宗足柄下郡入生田村紹
 太寺ノ末派ニ属ス、境内、
 東西十一間七分、南北十二
 間、面積百四十坪、未二十
 四度、字家ノ下三百四番地
 ニアリ、弘治元年、僧源永
 ノ開創ニシテ、臨濟宗鎌倉
 建長寺ノ末タリシヲ、寛文
 十年、僧森岩、当派ニ改メ
 鎮牛月二十日寂スヲ請待開
 山トス、當時ハ、現地ヨリ
 南、管沢ノ北岸ニアリシガ
 元録十六年十一月二十三日
 ノ洪水ニ、向沢闕崩シテ、為
 堂宇庄潰シ、住僧森岩、為
 メニ落命シ、境内流却セラ
 ル、此時、本村ノ人戸二戸三
 戸、此時、セルモノノ十六人、馬
 三頭八間、其三世僧宗悦、亭
 保十九年正月、現地ニ再立ス
 黒孫山 卯二十度、塔ヶ
 嶽ノ頂ヨリ西へ下ル百十八
 間ノ尾上、字ナベワリニアリ
 新篇相模風土記ニ曰、塔ヶ
 嶽ノ中腹ニ、黒尊仏ト稱フ
 ル大石タテリ、高五丈八尺許
 故ニ形ノ歴々アリ、此山ヲ、
 他郷ニテハ、尊山ト稱フ
 里民ノ説ニ、干魃ノ時、登
 山シテ、此石ニ祈請シ、雨

ヲ乞フト言フ、又石上ニ生
 スル苔ヲ、御衣ト稱シ、瘡
 疾ヲ煩フ時、是ヲ取テ、煎
 ジ用、井レバ、必効驗アリ、
 郡中三廻部村觀音院ニテハ
 此石ヲ孫山ト稱シ、其寺
 ノ山号モ孫山ト稱ヘリ、
 何ノ故アルカ、詳ナラズ、
 猶彼村條ニ弁ズ、言々、三
 記同卷ノ塔ヶ嶽考記ニ曰、吾
 皇國佛法流布開浮第一ナリ
 ト聞モ、此孫山ヲ安置スル
 道場他ニアルヲ聞カズ、稀
 ニ当國而已、言々翻譯名義
 集ニ、第一ヲ曰留孫、
 人壽六万歳ノ時出テ、成仏
 道為千仏ノ首地トアリ、千
 仏ノ上首トシテ、出世シ玉
 ヘル、如來ナレバ、吾等ニ
 ハ有縁ノ仏ニシテ拘那会、
 迦葉、釋迦三仏ノ祖師タリ
 可尊可信上巳又洛北知谷阿
 彌寺ノ中興澄禪上人ノ統伝
 一卷アリ、ソノ内夢想記ニ
 言、元禄二年巳十一月十四
 日此時遊禪ニ住セリ山曉ノ
 夢ニ、何人トモ姿ハ見エズ
 頂ヲオサヘテ、三度名ヲ呼
 ベリ、其名ヲ問ヘバ、我ハ
 近キアタリノ者也、是ヨリ
 北ニ当リテ、孫山ト言フ
 山アリ、此山往昔ノ世ニ拘
 留孫仏ノ舍利來下ノ地也、
 仏法繁榮ニシテ、世奉テ信
 ヲ生ズル所也、末世ノ今ニ
 至リテモ、其形蹟アリ、然
 ルニ、其舍利ヲ守護スル者
 也、汝一心菩提ヲ請ルガ故
 ニ、此舍利ヲ授クト、希有

ノ恩ヒヲナシ、頂戴セント思フニ、夢ハサメタリ、乃千手ノ内ニ舍利アリ、夜明テ之ヲ見ルニ、大小三十粒アリ、右ハ、澄輝自筆ノ記ナリ、正三位藤原実秋、謹書、今猶現存受伝家ニ珍藏スト、中略ス、サテ、拘留孫仏、全身ノ舍利ヲ納メシ塔ヶ嶽金剛座ノ靈蹟ナレバ、必ズ孫仏山ヘ登リテ、拜詣セバ、現世ニハ、無量ノ壽福ヲ得、来世ニハ、淨土ニ往生セシ事、無疑可知又当山ノ開基所見ナシ、役ノ行者、弘法ノ加持水ノ地名アレバ、二師モ登臨セシヨリ、諸人ノ詣スルハトハ思ハル、今山中ニ、貞治四年巳三月、ト鑄レル石像ノ不動、永祿十三年庚午、ト彫レル石像ノ役ノ行者、其余ノ銘文ナキ石仏、数十体、山中所々ニ安置セリ、古雅ニシテ近世ノモノトハ見エズ、今天保七年丙申マデ貞治四年ヨリハ、四百五十二年ナリ、今孫仏ト称ヘテ拜啓スルハ、自然石ニテ、恰モ菩薩仏陀ノ後光花台ニ彷彿タリ、按ズルニ是孫仏ノ正覺座ナルベシ、又説法ノ座ニモヤ、彼天笠前正覺山ノ金剛座石ハ、金輪際ヨリ湧出セシト西域記、慈恩伝等ニ見ユ、今此孫仏山ノ宝座石モ、嶮岨ナル処ニ、叢爾置タル容ナレモ、数度ノ大地震ニモ、壊動ナ

キヲ以テ靈石タル可知、マタ遺身ノ舍利ヲ納メシハ塔ヶ嶽ナラン、此処、先ハ当国ニテノ歌勝頂峯ナリ、登峯シテ、歴観マルニ、聖仙ノ境域、塵外ノ靈場ト謂フヘシ、塔ヶ嶽ニテ、望麗二十余村ノ地形恰モ幡旗ヲ敷ルガ如シ、是塔ニ対シテ、幡多ノ御名出テ、今ハ波多野ト称フ、又山脚ノ里名モ、堀ハ法里、菩提ハ那提、八沢ハ法沢、三廻部ハ釋迦牟尼、彌勒寺、クロケラナド山中ノ地名山下ノ村号、法爾法然トシテ、仏法有縁ノ由致アル地ト思ハル澄輝上人ニ護法神ノ告玉ヒシ如ク、世ノ末ノ今ニ至リテモ、其形蹟アリテ、其舍利今ニ朽ズトハ、実ニ有其旨趣尤尊シ、言々又三記同卷ノ條ワケノ日記ノ略ニ曰、登リ登リテ左ノ方ニ、石像ノ不動尊立玉フ、貞治四巳年三月、ト鑄レリ、其長二尺モ有ナン、台座ナドハ、天明六年二月、再建セシト誌セリ、昇ル十丁余ニシテ、石像ノ立像アリ、銘ニ、前孫仏ト刻レリ、是ヨリ女人結界ナリ、路嶮シクシテ、羊腸ヲ歩ムガ如シ、綱ツケト言フ、又昇ル十丁余ニシテ、少シキ平地ニ憩フ、南ハ大洋洋々トシテ、大島ノ利島、初島、豆州、卅ハ木ノ葉ヲ浮ベタル如ク、巖頭ニ尻ウタゲテ、海原ニ脚ヲ

洗フコトシヌ、中略幽谷ニ水声イト遙ニ聞エ、雷カト驚キテ魂ヲ冷シス、樵夫ノ伐木丁々トシテ、鋸ニ響キテ物スゴシ、深山ナレバ、鶯鳥ノ鳥ナクシテ、唯コマ鳥鶯ノ声、時々聞エヌ、又十丁程昇リテ、林樹ノ茂リ篠生、苔ムシテ道モナク暗キ処ヲ登ル七八丁ニ口嶺ニ至リ又、是ナン塔ヶ嶽ニテ四方一丁許リノ芝生ナリ、石塔アリ、古雅ニシテ、高二尺モアリナン、文字ナク唯幽カニ三梵字ミユ、鏡ノ太刀二尺許ニ振アリ、傍ラニ十一面觀音ノ石像アリ、享和ニ成ノ年、再興、ト彫レリ、是過去千仏ノ余、現在千仏ノ首ニ出世シ玉ヒシ俱留孫如来ノ舍利ヲ納メシ宝塔ノ昔ヲ思ヒテ、造塔セシモノト思ハル、今ノ石塔モ、四五百年前ノ物トミユ北ニ向ヒテ、左ヘ下ル三丁潤水岩頭ヨリ流れ出ルハ、弘法大師ノ加持水ナリ、是ヨリ樹ニマタガリ、岩ニ這スガリツ、迤ニ山ニソフテテ、一ツノ谷ヲ越テ、孫仏ノ座石ノ前ニ至ル、其石ノ形タルヤ、仏菩薩ノ後光ノ如ク、前ヘ少シ屈シヌ、蓮花座トモ覺シキ岩アリ、根ハ尖リテ、セマク、上ハ平ラニシテ、一丈三六七尺モアリヌベシ、ソノ後光ノ容ナル岩ノ高サ四丈モアリ、林ニ秀デ、ミユ、周匝モ

二十間許リアリ、如来ノ石像高サ二尺許ナルアリ、台座輪光ナシ、即チコノ石ヲ台座輪光トシ玉フ、鉄劍三振、木劍多クアリ、南ニ向テ昇ル三町、再ビ塔ヶ嶽ニ帰リ、塔ノ傍ノ東ノ方ノ峯ノ半ヘ降り、マタ登ル三十町許リ、大日ト言フ所ニ至ル、石像ノ彌陀仏ヲ樹ノマタニ安置ス、篠ヲワケラ、昇リテハ降り、下リテハ昇フ所ニ届キヌ、役ノ小角仙人ヲ祠レル所ナリ、アト、ビ、西眺、東眺ナド言フ所アリ、和州ノ金峯山ニ准ヘテ名ズケシナルベシ、役行者ノ石像ニ尺許リ其作ノ巧ナル、類ヒナク覺ユ永祿十三年庚申三月、ト刻メリ言々本村ノ人民ハ、概ネ川村岸、東光院ノ檀家ナル故ニヤ、前々ヨリ、此孫仏ヲ進退シ、例年四月六月兩度登山シテ、法乘修行シ、近隣村々ヘ御影札ヲ配布セリ、然ルニ明治五年中、三廻部村觀音院ヨリ、訴状ヲ足柄原庁ヘ出シ、特ノ答状又同十年中、神奈川原庁ヘ出セル状等ノ數通ヲ、東光院所蔵セリ、ソノ文中ニ曰足柄上郡玄倉村林内字小金沢ニ安置有之、拘留孫仏之儀ハ從前東光院守護罷在、住古ハ、參詣群集之由、中頃河村御關所御出来之後ハ御要害所ニ相成、守村之外

出入ヲ禁ジ、參詣モ稀ニ相成候得共、毎年三月登山致シ、其法乘無怠慢相勤來候言々、又明治十年神奈川原庁ヘ、上申状ノ文ニハ、御尊ニ付、左ニ申上候、川村岸、東光院儀ハ、住古ヨリ玄倉村一村祈願檀那ニ有之候故ニ、右安置之拘留孫仏石像進退勤行仕リ、年々四月六月兩度登山、法乘修行仕候、隨テ、近郷村々ハ勿論、隣村迄モ配札致シ、現ニ御影札等之板木存在仕候、去ル明治五年四月中、例年之通登山候処、三廻部村天台宗觀音院住職登山、右拘留孫仏別當タル旨、慢ニ建札相掲置候故、驚人、即刻談判ニ及ビ候処、旧小田原民政掛リヨリ、別當職被仰附候趣、返答有之候故不審之儀ト相心得、玄倉村役人同道ニテ旧足柄原御庁ヘ、相伺候処、右觀音院被召出、双方事実御糾問之上觀音院儀、不都合之廉々有之退山御申渡ニ相成、東光院ハ、從前通り、孫仏進退護持可致旨、被仰付、言々

余ハ、専ラ農ヲ業トシ、又薪炭ヲ出ス、女ハ、男ノ各業ヲ助ケ、傍ラ紡織シテ、自用ニ供ス
物産
(記載なし)
明治十八年五月二十二日稿
神奈川県令沖 守固
編輯掛
同 九等屬星野東作
(解説)
岡部 忠夫
明治八年六月、政府は國の現況を把握するため「皇國地誌編輯條例並着手法」と定め、各村々の概要を内務省地理寮へ提出するよう開拓史、府、県に公達しました。神奈川県の場合、地誌の編集年月は郡によって異なりますが、足柄上、郡では明治十八年から九年にかけて脱稿、公達されてから十年以上も経ていますが、それだけに当時としては、大変な仕事だったと思われる。ところが集められた全国の資料は東京帝国大学に所蔵されたままで、大正大地震のため惜しくも焼失、一つの本としてまとめられる

ことなく終ってしまいまし

そのようなことから、神奈川県図書館協議会郷土資料編集委員会は、県内に残存の村々の草稿をまとめ、『神奈川県皇国地誌残稿』と題し上、下二冊に分けて昭和三十八年から九年かけて刊行しています。

しかし、県下の村々全分が網羅されている訳ではなく、足柄下郡については小田原市の二十六ヶ村、足柄上郡については山北町の旧五ヶ村が収録されているのみです。この玄倉村については未収録で、私が山北高校に勤務していた頃、縁がありまして三保区長の池谷

嘉徳さんより、これまた、未収録の世附村、中川村の分と共に、多のコピーを頂いたものですが、一昨年、小田原図書館に提示しましたところ、早速、利用された方もおるようです。いざれ『神奈川県皇国地誌残稿』追録という形で発行される機会があるかも知れませんが、一応、会報に何回かに分けて紹介し上げたいと思っております。



我が郷土の我が家の年中行事(二)

西山 銈太郎

一〇、道祖神祭り

道祖神祭りは、一月四日にいわゆる「さいの神」の子供等が各家庭から門松を集め、十四日の午後それを燃やしてだんごやきをするのだが、それには遠い昔からむづかしい習慣があった。道祖神祭りは、小学校尋常科の生徒と、高等一年生

の男子によって行はれた。高等科一年生は数え年十五才だから、昔式に言えば此の年には元服をして大人である。此の一年生がガキ大将で、絶対の権力を持つてた。高等科二年生は一切口出しをせず、最後の「ざんばらい」の節先輩として招待され、子供らしく何がし

かを包んで行き御馳走に納めた。この年令のけじめは厳格だったが、戦後の新制中学発足後、何時の間にかガキ大将を二年やった組が出来、中学二年生がガキ大将になってしまった。然し昭和三十年頃になり、中学生は受験勉強でそれどころではないからと、道祖神祭りから手をひかせ様としたが、納得させるのに大変だったらしい。それ以来は小学生だけで、然も男女共で行う様になり、更に親達

此の大人にお礼として銚子一本の酒が贈られた。一月四日に門松を運び、小屋を作り、第一段の準備を終えた子供達は、夜各家を廻って「アクマーハラツテ福のく、アクマーハラツテ福のく、アクマーハラツテ福のく、アクマーハラツテ福のく」と神が舞い込む様に。と昼間作っておいたお掃いを持って神棚の下で呼んだ。各家では何がしかのお賽銭を出す。貰った報告をする

にはまだトランプ等は持っている子供はなかった。各自家から持って来たものをやき、新聞紙に包んで来た砂糖をつけて食べた。農家の子供は昼間は学校から帰って来たが、此の夜は友達と十分に遊べて夜の更けるのを忘れた。

払いの日である。登校日であれば朝早く登校前に、土・日曜日ならゆっくりだが今迄各家庭からお賽銭を貰ったが、そのお礼の菓子を手紙に包んで配った。道祖神前でだんごやきに来る子供等にやる菓子は、大きな策(親ざる)に入れて道祖神前に上げて置く。村の人々(大人達)は、午後道祖神前に集まって、おでんを肴におみきを上げて一杯やる。此の当番は二人宛順番にやった。当番の人はむしろや茶のみ茶碗、おでんの串差し等を準備する。このおでんは先の菓子と共に子供等にも与えられる。酒は前年の当番から十円を五円宛預ったので、その利息として五十銭宛を出し一円で酒を一升買う。そして又来年の当番に十円を申し送つた。此の十円は、どうせ村で一軒の酒屋から買うのだからと当番の申送をやめその酒屋に預け、毎年酒一升宛を出させる様にした。然し昭和になり、戦争と物の価の混乱との為めどうなってしまったやら。

一月四日に運んだ門松は年末に納められたす、はき竹、各家庭から貰って来た藁とで小屋を作る。十日前後の日曜日に、前年男の子の生れた家庭から、御神木用の太い竹を貰って来る。予ねて集めたお供えもちに使った手紙と若干の色紙とおしめを切る。細い竹二本を弓形にして先の御神木にくりつける。御神木の上の方から弓の両端を縄で結んでまげ、縄は長く下の方へたらしめてその先端に夏柑やネーブル等をぶら下げた。この御神木を建てる仕事だけは子供等だけでは一寸無理なので、ガキ大将の家の父親が手伝った。最後のざんばらいの時には、

悪魔払いの文句は子供も要領よく、いくらかでも多く貰い、貰いたいので、小さい子供が来てみると「この子がいい、子になる様に」とか、かぜで寝てる人が居たりすると「おじさんのかぜが早くよくなる様に。」等と言った。

悪魔払いが終わるとガキ大将の家に帰ってからは、双六やいろはカルタ、家族合はせ等で遊んだ。大正時代

おみきが終るといよいよさいとう払いとなる。点火されると威勢よく炎と共に黒煙が立ちのぼる。上級生はドンドコ、太鼓をたたいた。子供等は神棚の前に下げた書初を、竹の棒の先に

つけ煙にのせて遠くへ飛ばさうとする。上手な書初は遠くへ飛ぶのだと言はれてたので一生懸命にやる。だんごは直接竹の棒の先に付けてやいた。眉毛がやける如くに、顔がヒリ／＼して痛い様に熱いので、体をそむけた。竹の棒からだんごが落ちてしまった時等大変だった。(戦前の人々が物を、特に釘や針金等鉄材を大切にした事は、今の人々にはとても想像出来ない)

各家庭では十四日朝だんごを作った。赤・白・青等形も丸い普通のものから、黒芋・綿の花・繭・小判型等を作った。我が家では丸い細長いのがあった。祖母に聞いたら粟だと言った。前山から取って来た柏の木を、もちつき臼の上に乗せた石臼の穴にさし、そのてっぺんに日月を型どった大きい丸いのを二ヶ、他の枝に前記の多くのだんごをさした。又根本の枝のまたの処には俵を山と積んだ舟も作られた。(私が見ると俵とまりの区別はつかない) 神棚や仏担土蔵等にも柏の小枝に三ヶ宛さして供えられた。学校から帰って来て出来たてのやわらかいだんごを、砂糖も何もつけないで、急いで五つも八つもほぼりつ、道祖神の方へ駈けて行ったものだ。

このだんごは明十五日午後神棚等からも下げて一しよに木からもぎとり、麴板(味噌や醤油を作る為めの麴を作った箱)に入れられた。 サイトウ払いが終わると、子供等はガキ大将の家に集まりさん払いをする。此の時今迄貰ったお賽銭を、各家庭へのお札の菓子や道祖神へ上げた菓子、いろいろがみその他色々な費用を払った残りを、年令に応じて更には希望に依って或いは学用品を、或いは現金で分配した。こゝでも餓鬼大将の権力は絶対で、下番(来年の餓鬼大将)以下の年令に依る区分と、たった一才しかぢがはない餓鬼大将と下番とは格段の差がつけられた。(然し餓鬼大将の父兄の良識に依って年度に依り、大なる差のあった事は否めない。)

これは道祖神祭りと同関係ないが一月十四日は「十四日みそか」で夕食は必ずそばである。神棚や仏壇にも勿論そばを供えた。

一月十五日は明日へかけて十五日正月と言はれた。十五日の朝食は小豆粥を作った。これには前のお供えもちを入れて食べた。

日」と言って、農家では山の方へ行く事を慎んだ。此の日は山の神さんが出てると言はれた。昭和二十六年に八十才で死んだ祖母は「今日山へ行くと、山の神さんが子供をおぶって、暖かい日だまりで遊んでられるそうだ。それを見た人はおつけ病みをして寝こんでしまったそうだ。」と言う話をした。 その山の神さん祭る「山の講」が行はれてたが、我が部落では、大正の初期に物心ついた私でさえ、山の講と言う言葉は聞いたが、見た事はない。恐らく明治時代にはつぶれてしまったのではないかと思はれる。 曾我谷津部落では昭和六十年の今日尚行はれている。

一三、一月二十日 十月は神無月、その二十日はえびす講だが、太陽暦になつてからは十一月に行はれる様になつた。十一月は農繁期なので一月二十日が百姓のえびす講だと言はれた。えびす様を神棚からテーブルの上を下ろし、甘酒・お赤飯等をお供えりをした。

一四、地藏尊祭り 曾我岸部落の地藏堂は、毎月二十三日にお祭りをするが、一月及七月の二十三日と春秋彼岸との四回は特別のお祭り日だった。今で

は婦人達に依つてお念仏をする程度だが、戦前は時に芝居等も行はれた。 家族で亡くなった者がある場合には、市内板橋の地藏尊に三年位はお参りに行った。

一五、初天神 一月二十五日は初天神である。此の附近の天神様と言へば、国府津と大井町山田である。天神さんのお祭りはすべて二十五日で、国

府津は一月と四月、山田は三月である。勉強が出来る様に、入学試験に合格する様にお参りに行った。田舎の方よりも町の方が出易いので国府津の天神さんへよく行った。特に我家では祖父が国府津から婿養子に來、又祖父の母と叔母が国府津へ嫁したので、私も子供の頃からよくお参りに行った。

府津は一月と四月、山田は三月である。勉強が出来る様に、入学試験に合格する様にお参りに行った。田舎の方よりも町の方が出易いので国府津の天神さんへよく行った。特に我家では祖父が国府津から婿養子に來、又祖父の母と叔母が国府津へ嫁したので、私も子供の頃からよくお参りに行った。

自叙伝

寿昌寺住職 萩窪保育園長

大井諦玄

第四章 学生時代

第一節 中学四年第三学期 大正十四年一月世田ヶ谷中学校四年第三期編入の許可を得たのでこれから授業を受ける処が教科書は一冊もない震災で雨露に会い使用に堪えない、ノート一冊もない、ないないづくし、然も過去二ヶ年全く異つた軍隊生活智能的にも精神的にもいさゝかたぢぢぢ、幸に二三の友人の好意で国語、漢文は無本だったが何とか出来た、一番困つたのは数学、英語、数学は進度も科目も異う、英語は単語の忘却、何んとも致し方な

秋田県出身の須賀大俊君青森県出身の齊藤道契君が自炊生活で駒沢大学で勉強在学中一戸を借用して居たそれに飛び込んで同居させて貰つた、土曜日曜は洗濯で敷布、シャツ、股引等何んでも洗濯した、一切洗濯屋には出さなかつた、朝全員同時に起床、炊事当番は炊事朝食の準備、弁当を詰る、外の者は室内外の掃除授業に遅れない様努力が大変毎週土曜には一週間の献立作製、当番は一日交替だが献立表が無いと授業中今夜夕食は何にしようかを考

へて授業が身に附かない、表があれば安心、表によって学校の帰りに色々買物してもよし、一応家に帰ってから買物に出てよし各自の自由。 或る日学校から帰ると玄

この帽子に言うても中折帽子の帽子に白くがある、前々日私は中折帽子が欲しくて袴や時計を質入れて渋谷で買ったものそれをやられたのだから残念、無念須賀君や齊藤君は洋服やら参考書、手当り次第に持つていった早速警察へ届ける、お巡さんが調べに來た、お巡さん曰く盗人は一回では入らない二度も、三度も下見をして実行に移る、何曜日何時から何時迄は大丈夫と下調べ万端整つてから入るとの事、だから一日の平均日給は僅かなものだから、盗人は一向に不明、それから四ヶ月も経た後警察から連絡があつた、何月何日深川署へ出張せよとのこと一同喜んで指定の日に大きな風呂敷三枚用意して

齊藤君と私二人で深川へ行った、処が洋服の上着一着だけ、他の物は何も出ない私も彼も失望した、今の世は殺人や傷害事件、何十万の事件多様、私達の此一件物の数でない。

話は横道にそれたが夜中まで一生懸命に勉強した、血眼になって勉強した、仏祖の加護の御蔭で三学期の試験無事合格した、昔の同級生の中駒沢大学、早大、日大、帝大等へ合格したものの多数あった、兄や師匠には悪いがのるか、そるか無断で駒沢へ受験してみよう

受験科目は、英語、漢文、国語、地理、歴史、兎にも角にも闇雲に勉強した、処が合格した、さあ大変、早速兄に相談した、兄はしぶしぶ仕方ない、受かったからには入学しなさい、師匠は学資は出さないとのこと兄に全分出資を依頼することになった。

第二節 大学時代

小田急は大正十五年四月一日に新宿小田原間開通した、私も四月一日より之を利用して極楽寺より通学予科一年生、小田急も一年生当時駒沢大学学長は、滑谷快天(第八代学長)先生で予科三ヶ年学部三ヶ年であつた。

私は廿五才、毎朝未だ夜が明けないうちに家を出發

六時限終つて帰ると真闇、本人も大層時間的負担だが世話して呉れる儀姉保子さんは大変感謝感激で胸一杯私より遠い秦野から通学して居る男学生もあれば小田原から通学して居る女学生もあつた。

駒沢大学は経堂で乗り替へ豪徳寺下車、玉川電車に乗り、三軒茶屋下車、渋谷発の玉電に乗り替え駒沢下車漸く大学到着、随分不便であつた、だから私は経堂から徒歩で駒沢へ行ったものだ遙に時間が節約出来た。

二三年の後小田急で大和学園女子中学校を創設して同学園生徒には無料パスを出したとか免角乗客獲得に当時は懸命だったらしい私は中学時代は剣道が大好きで一級迄昇つた、けれど大学へ通学となると時間的に無理残念ながら止めた始は体調が悪かつたが日が過ぎるにつれ決方向向いた。

私は数学で身を立てる心算で中学を終つたが駒沢へ来たからにはそれは駄目、仏数学がよい、理由は教授陣が天下唯一だから、然し寿昌寺は骨山だから就職せねばならない、仏数学履修では倫理つまり修身の先生だから就職困難は必定、就職には国語、漢文、つまり東洋文学科に限ると思考し

た、そうになると数学の時間は身がはいらない、先生自身も君たちは落第点取らない程度に勉強すればよいと言ふ様な甘梅。

駒沢大学は大正十四年四月大学令による大学に昇格した時仏数学科、東洋文学科、人文学科の三学科が設立された。

私は中学時代から大勢の前で自己の意志を素直に表現し大衆に伝える、之に魅力があり之が宗門人の一生命でもある、だから弁論部雄弁部に入つて原稿を手にして三宿の練兵場で夕食後唯もいないのを幸に大声で練習したものだ、始は原稿を丸暗記、之が出来ると要点を箇状書にして之を文章にして演説する。これに達するには相当の努力と訓練が必要、弁論大会では生徒が対象だから生徒は中途で席を立たない、だから自己の点数が何点だか不明、然し大道演説とか浅草の公開堂の演説は左に非ずだ、内容的によくても、身のこなし、言語の流れが悪ければ聴衆は一人減り二人減り前演説者が折角集めた聴衆を減らしてしまう、こうなると当演説者は気の毒なもの、然し文字通り自業自得誰を恨まんやだ、曹洞宗のみは只管打座(只々座禅のみ)により自己を度脱するを本

分には相異なるが、時に応じ変に依つて説法も必要なのは論を待たない。私は夏休みを利用して夏期講演会を催し度いと思つた、然し先にたつものは何んとやら金を集めることが大変、秦野方面で実施する場合は秦野地方の寺院から寄附を依頼する、炎天に曹洞宗各寺院を廻る、講師には中根環堂先生、林屋友治郎先生、児玉達道先生、横浜の団野宗勝老師に映画を依頼した、私等学生は無論前座、私等学生時代は開演した所は、秦野が三回、横浜が二回、小田原が二回開催た、私が卒業後は遂に開かなくなつたらしい誰も先導する学生がいないと見える、残念なこと、講演会を開くのは容易でない、大努力無理もない、学生が開催するに当り働くことを追想して見ると、

- 一、寄附金を集める
 - 二、会場の設定
 - 三、講師の都合
 - 四、会場の近隣の青年会、婦人会に会場の設定と聴衆の獲得依頼
 - 五、学生が宿る会場へ布団、食料の心配、
 - 六、講師が泊る旅館と連絡、
- 私が訓誨を受けた諸先生の主な人は、
福井久蔵先生
国語

- | | |
|-------|----|
| 赤羽俊良 | 漢文 |
| 小柳司氣太 | 漢文 |
| 那智佐典 | 漢詞 |
| 西脇玉峰 | 漢文 |
| 諸橋轍次 | 漢文 |
| 安井小太郎 | 漢文 |
| 新井無二郎 | 漢文 |
| 笹川種郎 | 漢文 |
| 豊田八千代 | 漢文 |
| 高橋五郎 | 漢文 |
| 立花俊道 | 漢文 |
| 保坂玉泉 | 漢文 |
| 山上曹源 | 漢文 |
| 私 | 漢文 |
- 私は骨山であるが僧侶で

- | | |
|--|----------------|
| 赤秋の海浜 | 早秋の海浜 |
| 一雁秋を驚かす半月沖の弓 | 一雁秋を驚かす半月沖の弓 |
| 自ら無為に倦纏 | 自ら無為に入り俺が耦を亡う |
| 美哉此景是神工 | 美なるか此景是れ神工 |
| 音はトウ | 音はトウ |
| 夏日即事 | 夏日即事 |
| 沛然驟雨打窗声 | 沛然たる驟雨窓を打つ声 |
| 紫電轟雷宿鳥驚 | 紫電雷宿鳥驚く |
| 隔堵疾駆是執子 | 堵を隔て疾駆す是執の子 |
| 忽覩玄兔照彈箏 | 忽ちに玄兔彈箏を照す |
| 驟雨にわか雨 | 驟雨にわか雨 |
| 窓に音ソウ窓と同じ | 窓に音ソウ窓と同じ |
| 堵に音ト古代両側を板ではさんで中の土をつき固めて壁を作つた、その板の高さを堵と言う。 | |
| 観に音ケイ視と同じ。 | |
| 玄兔に月の異名 | |
| 送春 | 春を送る |
| 倉庚捨我喚不留 | 倉庚我を捨つ喚べども留まらず |
| 断送東君涕泗流 | 東君を断送り涕泗流 |
| 愛別離憂無尽恨 | 愛別離憂無尽恨 |
| 年々歳々令人愁 | 年々歳々人をして愁へしむ |
| 註 倉庚に鶯の異名 | |



ある以上五言絶句七言絶句位は出来ねばならない、処が東洋文学科に作詞科がない、是非とも作詞科を創設して欲しいと度々懇願した学部一年の時作詩一単位(一週二時間)設置され、二時間で先生が出題して絶句一詩を作る事を強要された以下を記述してみよう。

断送||あとかたなく送る
東君||太陽神の名、春の神

梅雨聴琴

梅雨琴を聴く

蕭蕭苦雨古江辺
倚几書翰思軒玄

蕭々たる苦雨古江の辺
几に倚りて書翰す思軒玄なり

隔幙彈琴誰子女
無詩有悶虚君顛

幙を隔て、琴を弾ず誰の女ぞ
詩なく悶有り君が為に顛せらる

几||つくえ 転玄||大層奥ゆかしい
顛||迷い意志ふさぐ音テン

苦雨||おもぐるしい雨
書翰||翰音カン筆とかふみの意書翰は文をかく意

梅雨

梅雨

階前鳥語解悲愁 階前の鳥語悲愁を解く

野逕成泥雨未休 野逕泥を成し雨未だ休まず

寂々梅霖無客問 寂々たる梅霖客の問う無し

独吟对酒竹亭幽 独り吟ず酒に対す竹亭幽なり

註 階||堂に昇る道階前は玄閑の前朱意偶成詩に階前梧
葉已秋声とある

野逕||田舎の細い道

梅霖||梅雨と同じ

幽||音ユウ奥深くおもむきあること
寂々||ものさびしくおくゆかしい貌

晚望即事

晚望即事

風梢雨洗樹間家 風梢雨洗う樹家の家

踏月吟詩価倍加 月を踏み詩を吟ず価倍加す

万点螢光明又滅 万点螢光明又滅

研哉此景使人嗟 研かな此景人をして嗟かしむ

註 夕方柏山の螢狩りに行った時の作詩

午睡

午睡

煩襟炎暑火雲天

裸体流汗不得眠 裸体流汗眼ることを得ず

翠葦疎榻午夢 葦を撃げ榻に疎り午夢を楚る

紅裙待覚尺書伝 紅裙覚る待って尺書伝う

註 東京は朝作った御飯が夕方さめないで腐って食べられ
ない程炎暑、学部一年第一学期試験中飯家して裸体で
も流汗、当低睡れない葦を持っていて近くの境内で午

睡した時の詩

蕈||タン円筒形の箱

蕈||竹や葦で織ったたかむしろ

紅裙||裙は下半身を被う服、紅裙は苦娘子もすそ

尺書||ラブレター

婆||むさぼる

夏日舟行

夏日舟行

南薰晚浦久忘機 南薰晚浦久しく機を忘る

密雨欽蛙暑氣微 密雨蛙を欽ばす暑氣微なり

夾岸随流浮小艇 岸を夾みて流に随い小艇を浮ぶ

過股鼓棹獲魚婦 股を過ち棹を鼓し魚を獲えて帰る

註 南薰晚浦||薰は香草||南の方香草が香る浦を
夕ぐれ舟行する

機||物事の主要な部分、きざし 忘機は無我にして吾を
忘却する

秋雨懷鄉

秋雨懷郷を懐う

西風引雨暮鐘微 西風雨を引き暮鐘微なり

獨倚欄干看葉飛 獨欄干に倚り葉飛を見る

一雁空行何処所 一雁の空行何の処にゆく

懷郷不思思依依 懷郷息まず思依々なり

註 依依||なごりおしく、はなれにくい貌、

秋日郊行

秋日郊行す

自心出郭氣尤清 心郭を出でしより氣尤も清

只聽寒砧雜笛聲 只聽く寒砧雜笛の聲

万里長空人不見 万里長空人見えず

疎鐘一杵此相迎 疎鐘一杵此れ相迎う

註 聽くは聞くでなく耳をすましてきくで此景一幅の画
の様な気がしすすと評を誰か言う

中秋宴集

中秋宴集

雨過風侵鬢 雨過ぎて鬢を侵す

銀蟾映水明 銀蟾水に映りて明なり

舉觴吹玉笛 觴を挙げ玉笛を吹く

寶主話涼更 寶主の話涼更なり

註 鬢||耳ざわのかみの毛

銀蟾||月の異名

觴||さかずき

秋宿山寺

秋山寺に宿す

露滴山門外 露滴山門の外

風吹古殿前 風吹く古殿の前

黃塵飛不到 黃塵飛んで到らず

真耐寬幽玄 真に幽玄を寛むるに耐たり

註 黃塵||ちりほこり

幽玄||奥深く微妙の意、言外に奥深い情趣

覺||音ベキ、訓もとむ目先が固定せざるきよるす
る意

秋夜困基

秋夜困基す

秋夜無余事

尋僧欲洗心 僧を尋ね心を洗はんと欲す

松窗戰鳥鷺

一着入幽襟 一着幽襟に入る

註 鳥鷺||鳥は黒色、鷺は白色の羽の色をなす故に鳥鷺
は困基を言う、しらすさ渉水鳥の一

幽襟||襟は衣服の合せ目又えりを言う故に心、胸の意
||は奥ゆかしい心、

明治節

明治節

帝州收芋粟

共祝仰朝廷 共に祝う朝廷を仰ぐ

四海皆臣子

同仁聖德馨

初冬偶成

牛羊急路欲斜陽

茅屋數間風趣長

獨喜烹茶如雀舌

柴門辛木帶繁霜

註 柴門 しばで造った門つまりむさぐるしい家陰者のす
まいなどと言う

歲晚述懷

窮陰独座夜窓虚

荏苒年光感有余

二十九辰無別事

空囊一飽煮寒蔬

註 野人二十九才作自炊生活時

竹影

竹影

吟詩坐静万慮清

炒栗烹茶夜幾更

六出撲簾声浙々

窓前竹影寂無声

註 六出||雪の異名

詩を吟じ坐静にして万慮清し

栗炒り茶を烹夜幾更ぞ

六出簾を撲ち声浙々

窓前の竹影寂として声無し

更 更は時の区分で午後八時から二時間づゝ、午前六時五分分した幾更は何時だろう、故に三更は午前零時から午前二時の間の称

送友人

出郷千里幾時帰。野寺含烟欲夕暉。柳下行装分手去。離憂不尽淚沾衣。

初秋偶成

幽棲客舍北窓風。切々虫声與豈窮。遙想阿嬈猶未睡。晚來寂々月玲瓏。

歲晚

忽々年光屬歲除。飡蔬素飽一茅廬。人間万事休憂慮。無作無為常晏怒。

元且偶吟

歲首康哉氣益振。新蔬煮餅醉芳醇。薰風及嬌吟嘯戲。萬里熙々帝德純。

田家雪

飛絮撲面醉高吟。只見寒雀入溪陰。蛙敲乍疑銀世界。有詩有雪值萬金。

元且偶吟

春光瑞氣道情真。既已朝課酌酒頻。先年曲折吾何恨。釣月耕雲樂至仁。

朝課

道情真 田道を求むる心意が真にして実 曲折 或は家庭を助け或軍隊生活した事

釣月耕雲 月を釣り雲を耕すことで寂情無為の生活 偶吟 謹迎新壽斗当甲。平素疎音蓋不暝。貴殿多佳応有象。俺為葦草仏憂貧。

元且一書 元正課罷月三更。小飲閑談万慮清。悟得春光詩物袖。是我年頭第一声。

夜竹山廬 夜竹雨を聴くに宣し 秋冷詠書を好む 疎籬晚節の菊 隱史山廬に住す

記事は前後するが大正十五年(一九二六)十二月廿五日天皇陛下崩御、御寿四十八才十二月廿五日以降昭和元年今上天皇踐祚、翌昭和二年四月十日不肖神奈川県小田原市荻窪五四六寿昌寺住職大井大雲師の室に於て嗣法する、次に嗣法の概要を述べてみよう。

嗣法は伝法とも言う、伝法は弟子がいくら頼んでも師匠が許さねば、行くことは出来ない、師匠が伝法を許して嗣法が成立する。住職は毎朝堂を巡るが伝法の業の時は資(弟子)が巡堂する、即ち本尊仏、土

第五章

前教職時代

前教職時代は昭和六年(一九三二)私三十歳四月一日から昭和十二年(三十六才)八月卅一日迄即ち支那事変による充員召集を受ける前日迄六年五ヶ月を言う。私の本師大井大雲の法第大井龍跳師が曾我に自修学校を経営して居られる、その校長先生から請せられ昭和六年四月一日から先生になつたわけ。

私と同時に右学校に就職した先生は、駒沢東洋文学科卒業相山善榮寺徒弟榮重成先生東洋大学国語漢文科卒業向原香集寺徒弟高田信哉先生以前から生徒の訓育に従事して居られた方は田代信二先生と椎野忠助先生で計六人、各種学校で二年制で生徒数三百、私は國語が専門だが、英語数身体操何んでもござれ。

或る年正月廿二日壽昌寺本寺諏訪原総世寺大般若会に随喜した折に奥さんから短歌を頂いた。幾年の思出深きさみつ、青空の下に土と親しむ 右の返歌に 私 は 幾年の土と親しむ なれこそは 誠の仏と 我は おがまん 更にまた 総世の土と親しむなれも また 誠の仏と 我は 思いそ

学生の時は机に向つて安坐したので立つことは余りせぬ、けれど先生ともなると腰掛は厳禁、二時間立ち続け、これは仲々大変な努力、一日三時間乃至四時間日が立つにつれ馴れて来た追々楽になつた、生徒が本当に勉強して我が意を得て来ると立つ苦はどこかへ飛んで行く、時折駒沢大学教授諸橋轍次先生の朗読の声体模写して漢文の典儀に引き入れようとしたが仲々思ふ様にならないものだ。この辺で施餓鬼会の法語を記してみよう。

施餓鬼会香語 甘露門中一柱煙。精靈招此体安然。海山珍珠神通力。功德無量法悦円。



つづく